

樋
ノ
下
遺
跡

樋ノ下遺跡

地方特定道路整備事業(代行)市道1級208号線に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

地方特定道路整備事業(代行)市道1級208号線に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

二〇一二年

群馬県桐生土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



2012

群馬県桐生土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

樋ノ下遺跡

地方特定道路整備事業(代行)市道1級208号線に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2012

群馬県桐生土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

栃木県日光市の皇海山や庚申山などを水源とする渡良瀬川は、渓谷美を創り出しながら群馬県桐生市の市街地で関東平野の北縁に達し、古くからこの地の文化と産業とを見守ってきました。この桐生市が「仁田山紬」など全国的に著名な絹織物業の故地であることは、御案内のとおりです。

この渡良瀬川の渓谷域を占めてきた勢多郡黒保根村は、平成17年6月に桐生市に編入され、新たに桐生市黒保根町としての歴史を歩み始めたところですが、この地では昭和初期に岩澤正作翁による考古学的な知見がもたらされていらい、多くの埋蔵文化財包蔵地の存在が知られるようになりました。

本書で報告します樋ノ下遺跡の調査は、同町下田沢地区を通る市道1級208号線の道路改修工事にともない、群馬県桐生土木事務所からの委託を受けて財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が、平成23年9月に発掘を実施したのですが、今回の調査は同町内における初めての発掘調査となりました。この調査により、縄文時代中期の竪穴住居が検出され、はるか先史に遡る集落の存在が明らかになりました。

この成果により、この地域の歴史をひもとく上で貴重な資料を新たに提供できたものと考えております。今後、本報告書が郷土の歴史研究や教育の場で活用されることを願ってやみません。

最後に、発掘調査から報告書の作成に至るまで、群馬県桐生土木事務所をはじめ、群馬県教育委員会、桐生市教育委員会、並びに地元関係者の皆様には多大なご指導、ご協力を賜りました。本報告書の上梓に際し、関係者の皆様に心から感謝を申し上げます。まして序といたします。

平成24年10月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 須田 榮一

例 言

1. 本書は、平成23年度社会資本総合整備(活力基盤(代行))市道1級208号線事業に伴い発掘された樋ノ下遺跡の調査成果を、平成24年度地方特定道路整備事業(代行)市道1級208号線に伴う樋ノ下遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書として刊行したものである。
2. 樋ノ下遺跡は群馬県桐生市黒保根町下田沢3062-1、3064-2番地に所在する。
3. 事業主体 群馬県桐生土木事務所
4. 調査主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団(平成24年4月1日に公益財団法人に移行)
5. 整理主体 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
6. 発掘調査の体制と期間は次のとおりである。
調査担当 友廣哲也(上席専門員)
遺跡掘削請負工事 有限会社高沢考古学研究所
地上測量及び空中写真撮影 アコン測量設計株式会社
履行期間 平成23年9月1日～平成23年11月30日
調査期間 平成23年9月1日～平成23年9月30日
調査面積 214㎡
7. 整理事業の体制と期間は次のとおりである。
整理担当 新倉明彦(上席専門員)
履行期間 平成24年8月1日～平成24年11月30日
整理期間 平成24年8月1日～平成24年8月31日
8. 本書作成の分担は次の通りである。
編集 新倉明彦
本文執筆 長谷川博幸(主任調査研究員)
デジタル編集 齊田智彦(主任調査研究員)
遺構写真 発掘調査担当者
遺物写真 佐藤元彦(補佐(総括))
遺物観察・観察表執筆
縄文時代の土器 谷藤保彦(上席専門員)
縄文時代の石器、その他石器類 岩崎泰一(上席専門員)
9. 発掘調査および報告書の作成にあたり群馬県教育委員会事務局文化財保護課、桐生市教育委員会文化財保護課の指導と助言を得た。
10. 発掘調査の記録資料と出土遺物は、群馬県埋蔵文化財調査センターで保管している。

凡 例

1. 本文中に使用した方位は、総て国家座標(国家座標第IX系)の北を用いた。調査区はX=55,836~55,854、Y=-50,735~-50,754の範囲に収まり、真北との偏差は遺跡南西隅部で0度20分13.32秒であった。
2. 遺構平面図や遺構断面図に示した数値は標高であり、単位はメートルである。
3. 遺構平面図、遺物実測図の縮尺は各図にそれぞれ示した。遺物写真の縮率は原則1/3とし、それ以外のものは明記した。
4. 遺物番号は出土遺構ごとの通し番号とし、器種・分類順に記載した。番号は遺構図、遺物実測図、遺物観察表、遺物写真図版とも一致している。
5. 本書の図版に使用したスクリーントーンは、次のことを示す。

遺構平面図

カクラン  硬化面 

6. 遺構図の記載方法は以下のとおりである。
 - ・遺構の主軸方位・走向は、長軸方向で北から東西90°以内を主軸とした。表記は北を基準とし、東に傾いた場合N-○°-Eとした。
 - ・遺構の面積は、上端を計測した。計測はプランメーターで3回行いその平均値を採用した。
 - ・遺構・遺物の計測値で、全体を計測できないものについては、現存の値を記載し()で表した。
7. 遺物観察表の記載方法は以下のとおりである。
 - ・計測値の()は現存値を示す。
 - ・土器の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖1988年版』に基づいている。
 - ・胎土表記中の細砂・粗砂・礫は、径2mm以上を礫、径2~0.2mmを粗砂、径0.2mm以下を細砂とした。
8. 本書で使用した石器・石製品の図版上での表現は以下の通りである。
 - ・礫石器類に用いた縦位・横位定規線は摩耗範囲を示す。
 - ・その他の斜位定規線は線條痕の走行を示す。
9. 本書で使用した赤城山噴火による降下火砕物等の呼称については、以下のように表記する。

赤城鹿沼テフラ：Ag-KP
10. 遺構の土層断面図の太線は、生活面(使用面)を表している。
11. 本書で掲載した地図は、下記のものを使用した。

国土地理院 地形図1:200,000「宇都宮」(平成18年4月1日発行)
桐生市 1:10,000現形図(昭和63年6月測図)
国土地理院 地形図1:25,000「赤城山」(平成21年1月1日発行)
「上野花輪」(平成21年1月1日発行)
「鼻毛石」(平成14年9月1日発行)
「大間々」(平成8年7月1日発行)
12. 参考文献は第4章末に一括して掲載した。

目次

序	4 整理作業の経過	2
例言	第2章 遺跡の地理的・歴史的環境	
凡例	第1節 遺跡の立地	3
目次	第2節 遺跡周辺の歴史環境	4
挿図目次	第3章 検出された遺構と遺物	
表目次	第1節 調査の概要	7
写真図版目次	第2節 基本土層	7
第1章 調査の経緯・経過と方法	第3節 旧石器時代確認調査	7
第1節 調査に至る経緯	第4節 検出された遺構	9
第2節 調査の方法と経過	第4章 調査成果のまとめ	13
1 調査区について	参考文献	13
2 調査経過	報告書抄録	
3 調査日誌抄録		

表目次

第1表 主な周辺遺跡	6	第2表 樋ノ下遺跡遺物観察表	14
------------	---	----------------	----

挿図目次

第1図 遺跡位置図	1	第6図 樋ノ下遺跡遺構全体図	8
第2図 遺跡位置及び周辺図	2	第7図 1号住居	9
第3図 周辺地形分類図	3	第8図 1号住居出土遺物	10
第4図 周辺遺跡位置図	5	第9図 1号小竪穴遺構	11
第5図 樋ノ下遺跡柱状土層図	7	第10図 1号小竪穴遺構出土遺物	12

写真目次

PL. 1 1 樋ノ下遺跡遠景(南東から)	5 柱状土層(東から)
2 樋ノ下遺跡近景(東から)	6 遺構確認作業(東から)
PL. 2 1 1号住居全景(東から)	7 樋ノ下遺跡近況 (東から平成24年8月3日撮影)
2 1号住居遺物出土状況(南から)	PL. 3 1号住居出土遺物
3 1号住居土層(北から)	PL. 4 1号小竪穴出土遺物
4 1号小竪穴遺構(東から)	

第1章 調査の経緯・経過と方法

第1節 調査に至る経緯

市道1級208号線は桐生市黒保根町下田沢内の県道沼田大間々線を基点として、県道根利・八木原・大間々線に至る道路である。国道122号線と並行しているため、迂回路として利用されているが、山間部を通過しており、狭く、カーブや勾配が著しい道路であり、安全な道路として整備されることが求められていた。このような状況から、平成21年度より道路幅を拡幅し、カーブや勾配を緩くする道路拡幅事業が開始された。事業範囲において、周知の埋蔵文化財包蔵地を通過することがわかり、埋蔵文化財の取り扱いに関わる行政的措置が必要となった。群馬県東部県民局桐生土木事務所から照会を受けた群馬県教育委員会は、平成22年9月に試掘調査を行った。

試掘調査は事業地内に幅1mの試掘坑を3本設定し、重機を使用して、遺構確認面まで掘削し、遺構検出面の確定及び遺構有無の確認、遺物出土の確認を行った。縄

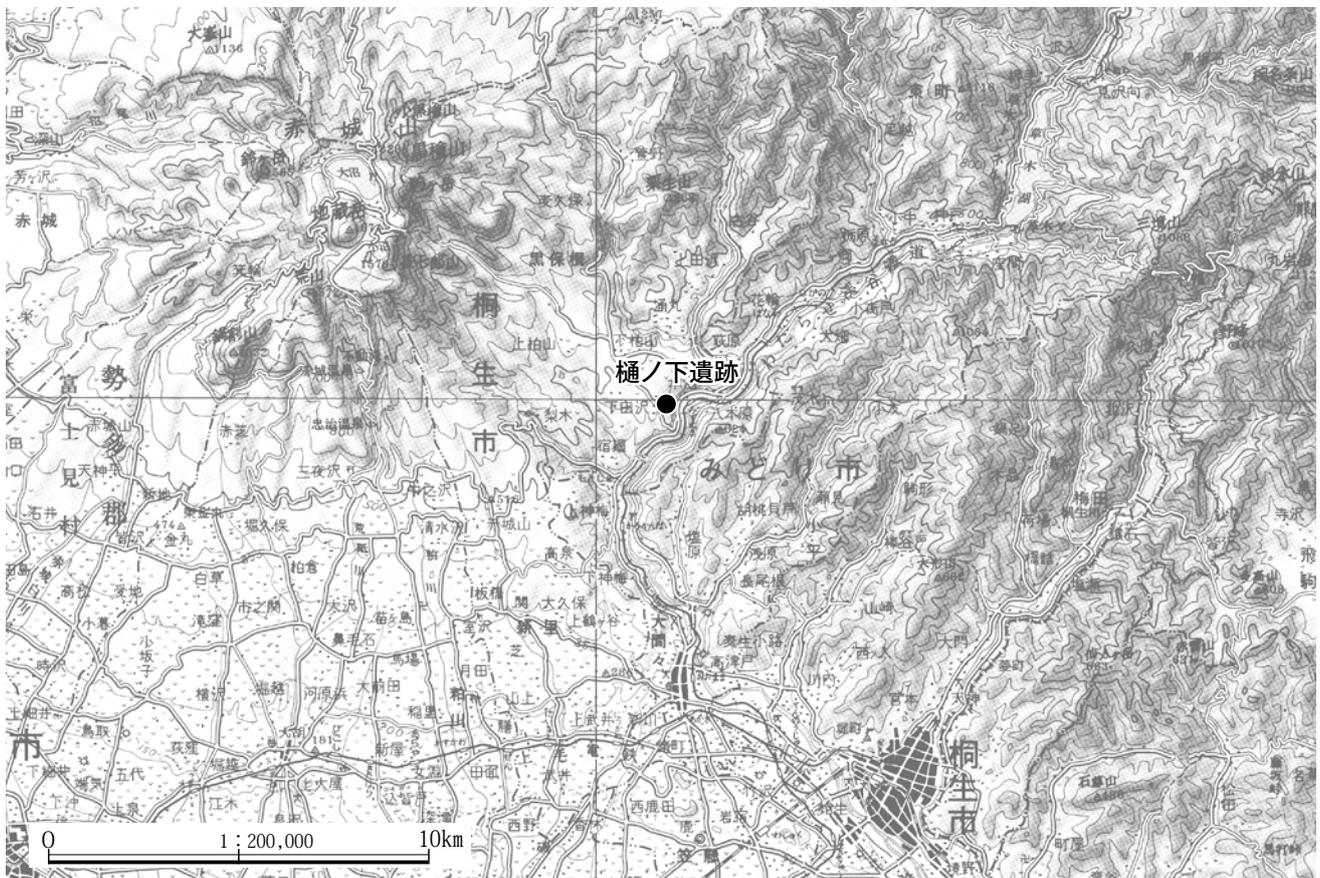
文時代住居跡及び縄文土器の出土が認められた。この結果、事前の発掘調査が必要との判断から調整にあたった群馬県教育委員会より、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に対し「樋ノ下遺跡」の発掘調査が依頼された。

これにより群馬県東部県民局桐生土木事務所と財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団との間で平成23年度の発掘調査の契約が締結され、平成23年9月1日調査開始にむけた届出等の事務処理が進められることとなった。

第2節 調査の方法と経過

1 調査区について

調査対象地は狭小であったため、調査区割をせずに調査を行った。調査中は調査の工程を考慮し、便宜上調査区東側と西側と呼称した。調査区の座標値は、国家座標第IX系(世界測地系)を用いた。



第1図 遺跡位置図(国土地理院地形図1:200,000「宇都宮」(平成18年4月1日発行)使用)

2 調査経過

調査は9月1日に着手したが、表土掘削は台風の影響により9月6日より行った。調査は排土置き場の関係から調査区東側より表土掘削を行った。東側は攪乱により遺構が確認されず、そのまま旧石器調査を行う。旧石器調査終了後、西側掘削に伴う重機進入路を確保するため、東半分を埋め戻す。東半分埋め戻し後、西側の表土掘削を行い、調査を継続した。西側では縄文住居の遺構調査を行い、旧石器調査も併せて実施した。9月29日に西側を埋め戻し、9月30日にはすべての調査が終了した。

3 調査日誌抄録

平成23年9月

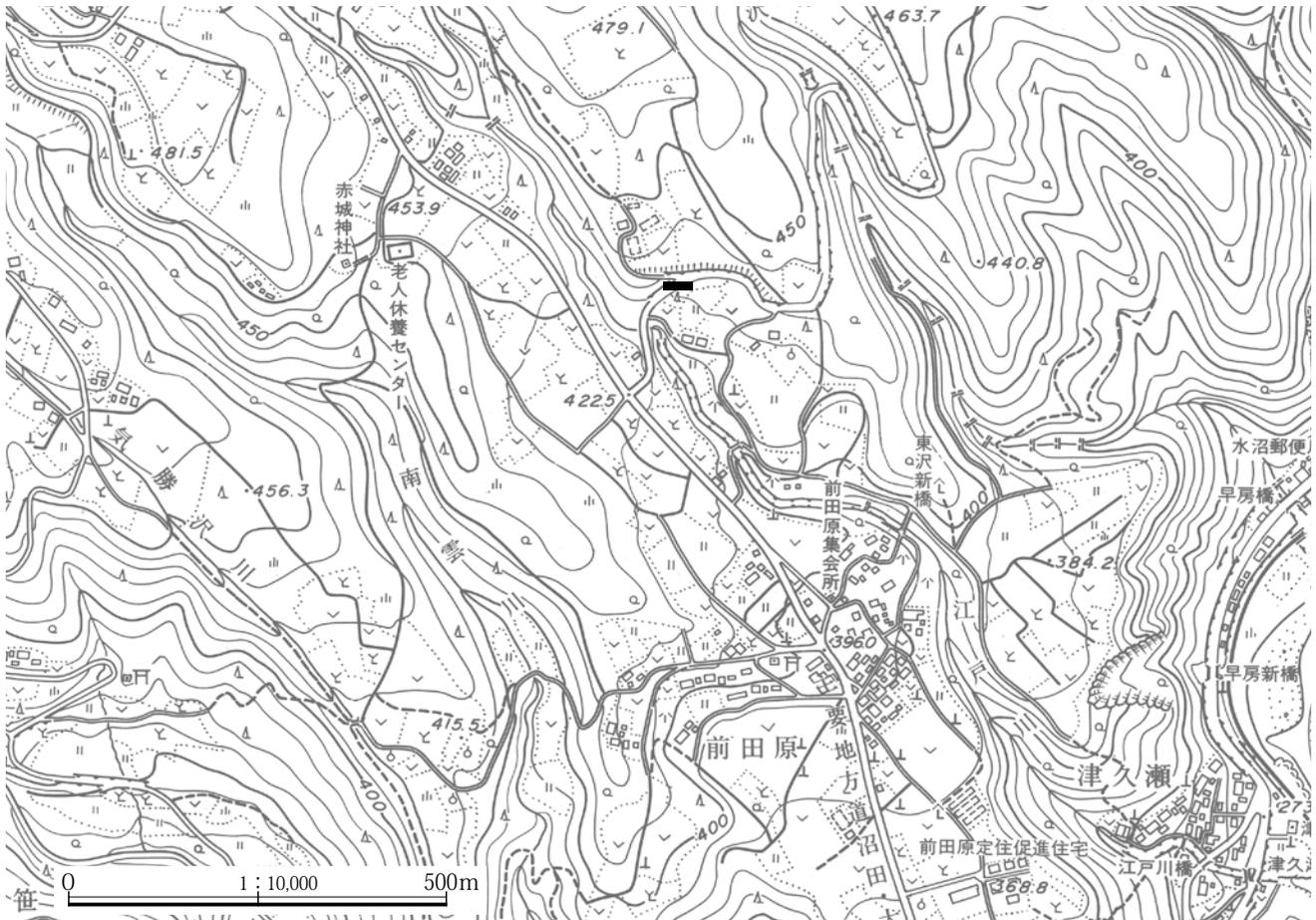
- 1日 調査着手。
- 6日 調査区東側表土掘削開始。
- 8日 調査区東側旧石器調査開始。
- 14日 調査区東側旧石器調査終了。
- 15日 調査区東側埋め戻し並びに調査区西側表土掘削。

- 16日 調査区西側縄文時代遺構調査着手。
- 26日 調査区西側縄文時代調査終了、旧石器調査着手。
- 28日 調査区西側旧石器調査終了。
- 29日 調査区西側埋め戻し。
- 30日 事務所・機材撤去。

4 整理作業の経過

樋ノ下遺跡の整理作業及び報告書編集作業は平成24年8月1日から平成24年8月31日まで実施した。収納されている出土遺物や記録類の確認作業から開始し、次にデジタル遺構写真のリネーム作業、遺構図の修正作業、土器・石器の分類・復元作業及び写真撮影などを行った。

その後、報告書に掲載する遺構写真の選び出し作業、土器・石器の実測・トレース作業、観察表の作成作業、遺構図のデジタルトレース作業を行い、原稿を執筆し、報告書作成のための組版作業をデジタルで行った。整理作業の最後には、遺物管理台帳及び写真管理台帳を作成し、今後の活用に備え遺物やその他資料の収納作業を行った。



第2図 遺跡位置及び周辺図

(この地図の作成にあたっては、桐生市長の承認を得て、同市発行の10,000万分の1現形図を使用し、複製したものである。)

第2章 遺跡の地理的・歴史的環境

第1節 遺跡の立地

樋ノ下遺跡は群馬県桐生市黒保根町下田沢3062-1他に所在する。立地標高は約420mである。桐生市黒保根町は群馬県の東北端に位置しており、赤城山の東麓が町域の大部分を占め、町域の大半が山岳地帯である。また、町域の南東端では、北東から南西にかけて渡良瀬川が流下している。渡良瀬川左岸の町域は足尾山地であり、荒神山などがその南西端の一角を占めている。

赤城山は山頂部が10あまりの山々から形成されている、那須火山帯に属する複合成層火山である。赤城山の火山活動は三つの時期に区分されている。

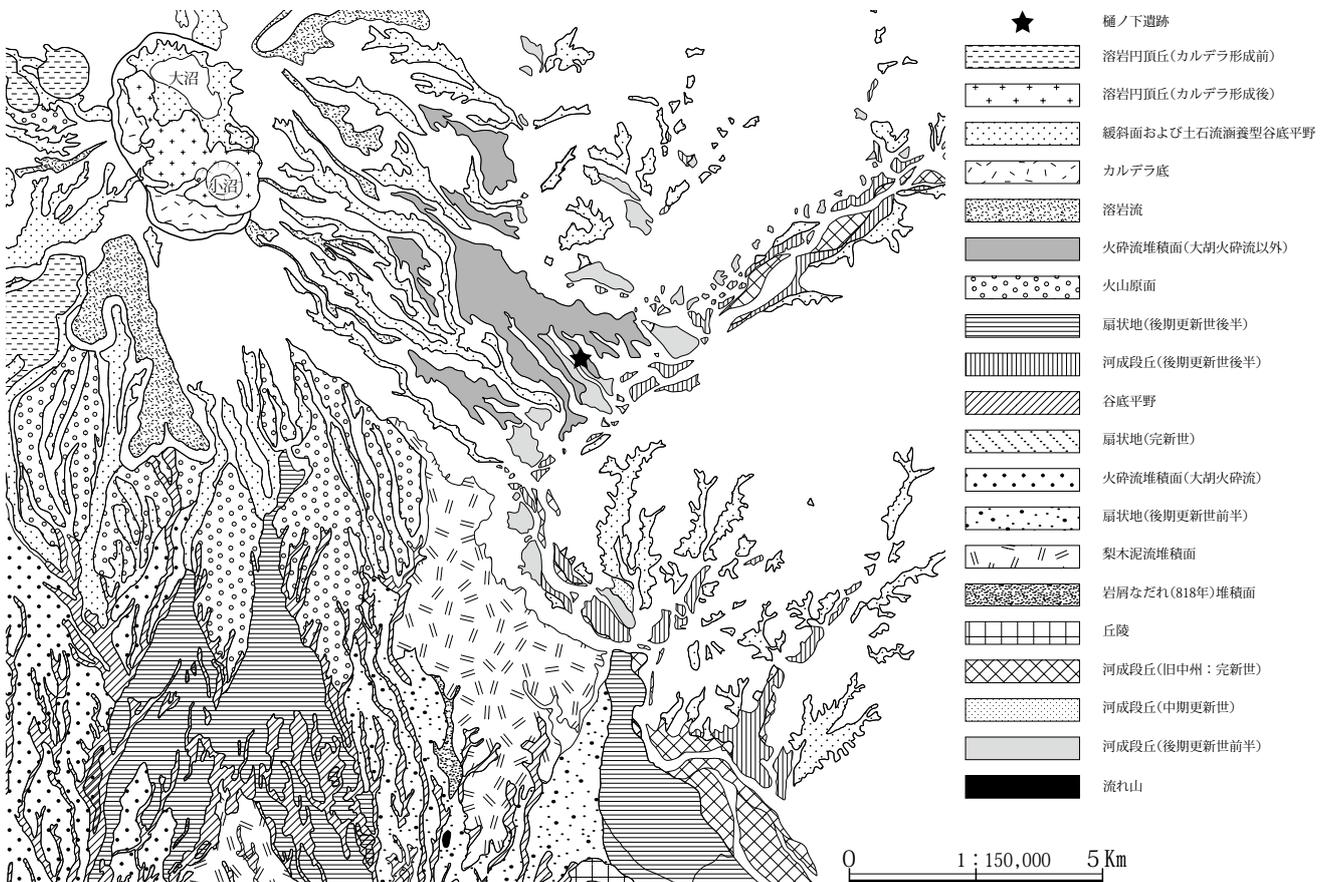
古期成層火山形成期はおおよそ40～50万年前からはじまり、約13万年前頃まで続いた。この時期に大規模な成層火山が形成されたが、約20～30万年前には、山体崩壊による大規模な岩屑なだれである梨木泥流が発生し、約4立方キロメートルと見積もられている堆積物が東麓から

南東麓にかけて堆積した。新期成層火山形成期はおおよそ13万年前から4～5万年前まで続いた。この時期には火砕流を伴う噴火が多く、西麓から南麓にかけて「棚下火砕流」、「大胡火砕流」がおり、湯ノ口軽石の噴出に続いて発生した「ガラン石質火砕流」などが堆積した。

その後の中央火口丘形成期を経て、現在の姿となっている。黒保根町域では火山斜面や火砕流堆積面などが観察できる。

町内南東部を流下する渡良瀬川は足尾山地西北端の皇海山を起源とし、茨城県古河市で利根川に合流している。町内では赤城山斜面と足尾山地の境界を流下し、河岸段丘を形成している。町の中心集落である水沼はこの渡良瀬川河岸段丘の下位面に発達した集落である。

本遺跡は赤城山裾野斜面の北西から南東に細長く延びる台地上に位置している。この台地は江戸沢川右岸に立地している。赤城山東麓は、黒松山・駒ヶ岳・長七郎山など赤城山外輪火口壁を形成している尾根から放射状に



第3図 周辺地形分類図(群馬県『群馬県史通史編1』付図2を改変使用)

水流が発達している。この水流が斜面を樹枝状に浸食して段丘及び谷地形を形成している。黒保根町域では田沢川・寒戸川・高橋川・鹿角川・小黒川・鳥居川・猿川・矢寄川・川口川・深沢川などがそれにあたる。本遺跡が面する江戸川もその河川の一つである。

本遺跡は、渡良瀬川河岸段丘の上位面に位置している。しかし、本遺跡が立地する台地は江戸川に沿うように延びており、渡良瀬川の作用ではなく、江戸川の作用により形成された台地と言える。

遺跡の場所は、河川に面した南向きの台地であり、縄文時代の人々が生活するのに良好な環境であったと考えられる。

第2節 遺跡周辺の歴史環境

桐生市黒保根町(旧勢多郡黒保根町)では、今回の調査以前に、学術調査や開発に起因する発掘調査は実施されておらず、全容が把握されている遺跡はなかった。しかし、昭和初期には岩澤正作が縄文時代遺物を中心とした遺物収集調査を行い、平成9年には黒保根村が『黒保根村誌』刊行に伴い遺物の集成を行い、平成17年度より桐生市教育委員会が分布調査を行い、その概要が明らかとなった。これらの成果を踏まえると、遺跡周辺の歴史的環境は以下の通りである。

旧石器時代 旧石器時代の遺物は水沼上野遺跡(第4図55)及び医光寺遺跡(79)で確認されている。どちらも田沢川右岸の台地上に位置している。

縄文時代早期 遺物は『黒保根村誌一』によると水沼地区・清水地区で採集されている。山形押型文・捺糸文を伴う尖底土器がそれに含まれており、稲荷台式土器とみられる。

縄文時代前期 『桐生市黒保根地区遺跡分布地図』によると、遺跡はまんべんなく町域内で確認されており、縄文時代を通して前期の遺跡数が最も多い。この傾向は赤城山麓の他地域でも認められる。採集により確認されている土器は羽状縄文・沈線文を特徴として持つ黒浜式土器や竹管文を特徴として持つ諸磯式土器が多く、特に諸磯b式土器が顕著なようである。

縄文時代中期 中期の遺跡は、前期同様町域の至る所で確認されているが、前期より遺跡数は減少している。採集されている中期の土器は阿玉台式土器や加曽利E式土

器などである。

縄文時代後期 後期に入ると、町内で確認されている遺跡は大幅に減少している。9遺跡を数えるのみで、水沼地区では遺跡が確認されなかった。赤城南麓地域でも後期の遺跡はそれまでの時期と比べ激減しており、地形変動などなんらかの自然的変化が起こったことが考えられる。

弥生時代 町内で確認されている弥生時代の遺跡は向反り3遺跡(85)など3遺跡のみである。いずれも弥生時代中期以降の遺物が採取されている。弥生時代の遺跡数は縄文時代のそれに比べると極端に少ない。狩猟採集から農耕へと生活が変化した人々にとって赤城山東麓は暮らすことが困難な場所であったのであろう。

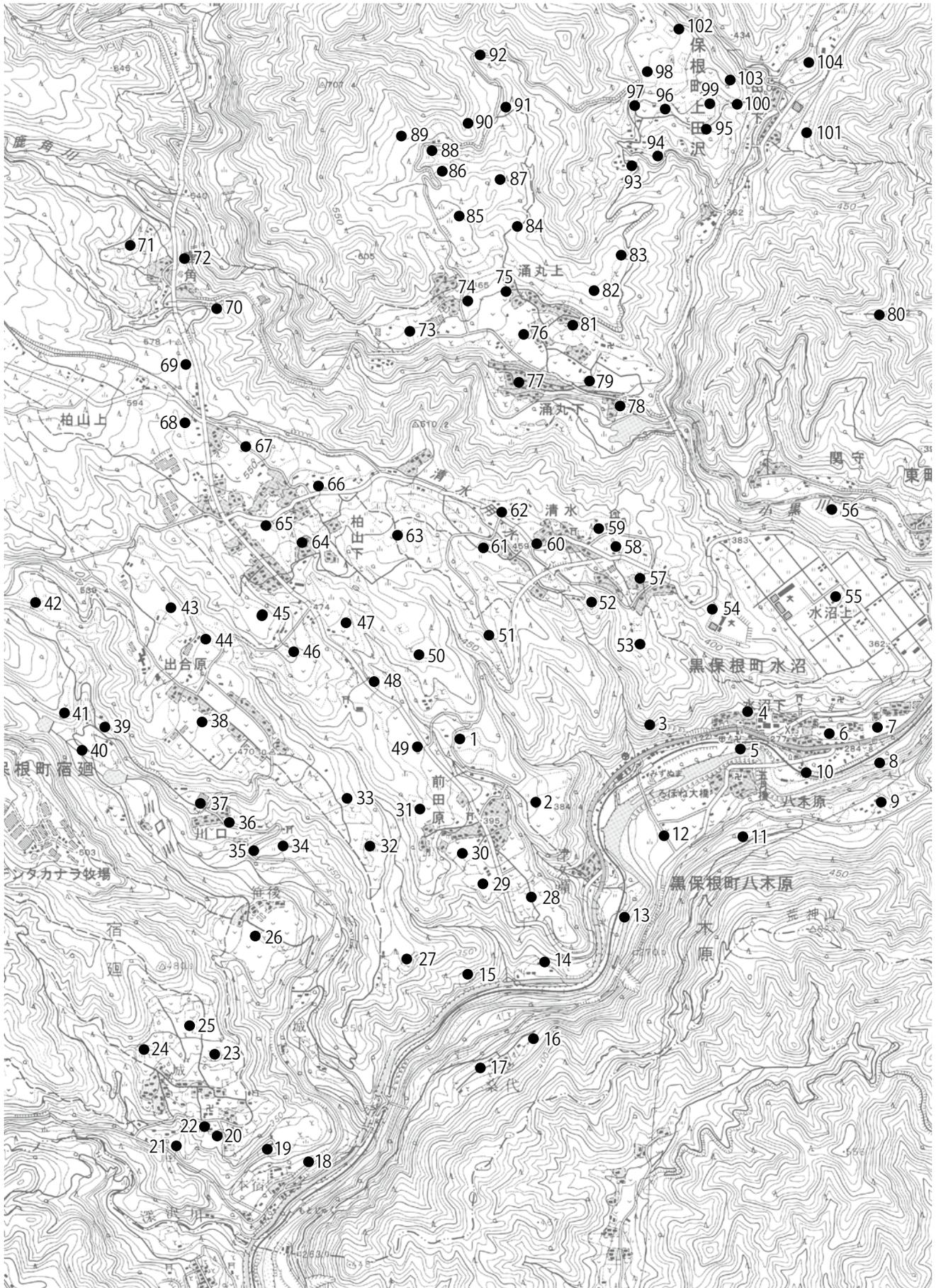
古墳時代 『上毛古墳総覧』によると勢多郡黒保根村では2基の古墳が確認されている。そのうちの第2号庚申塚(59)は現存しているが、第1号三塚は削平により消失している。遺物は立道遺跡(72)及び栗生平遺跡で確認されている。

奈良・平安時代 奈良・平安時代の遺跡は町内で63遺跡が確認されている。鍛冶屋遺跡(4)・水沼上野遺跡(55)・大皿久保1遺跡(99)・中清水遺跡(60)・尾池原遺跡(33)などから鉄滓が出土しており、製鉄や鍛冶が行われていたことが想定される。

中世・近世 黒保根町を含む渡良瀬溪谷は、中世には黒川谷と呼ばれるようになり、武士団として活動していた人々は黒川衆と呼ばれていた。黒川衆の中心となっていたのが阿久沢氏である。

阿久沢氏は黒川谷の深沢城(22)を本拠にしていた。東毛と沼田を結ぶ根利峠に通ずるこの地は当時上野国に進出してきた上杉氏・後北条氏どちらも押さえておきたい要所であり、阿久沢氏は上杉氏及び後北条氏とも通じていた。阿久沢左馬助は、永禄十一年(1568年)ごろから進められた後北条氏と上杉氏の同盟、越相同盟推進の正使の警護・接待を行っており、後北条氏から感状を下されている。

越相同盟破綻後の元龜四年(1573年)金山城の由良成繁が桐生氏を滅ぼすと、桐生氏を配下においていた上杉謙信は報復措置として、天正二年(1574年)3月、五覧田城(80)を攻略する。しかし、謙信が越後に帰国した同年9月には由良氏が五覧田城根小屋で上杉方300余人を打ち



第4図 周辺遺跡位置図(国土地理院発行地形図「赤城山」「上野花輪」「鼻毛石」「大間々」使用1/25,000)

第2章 遺跡の地理的・歴史的環境

取るなど激しい戦の後奪い返した。

天正十二年(1584年)由良氏が後北条氏と対立すると、後北条氏は阿久沢氏を中心とする黒川衆に五覧田城を攻め落とさせた。この戦ののち後北条氏に従った阿久沢氏

は豊臣秀吉の小田原攻めに後北条方として参戦し、敗れる。阿久沢氏をはじめとする黒川衆の多くは戦国時代の終わりと共に帰農したと言われている。

第1表 主な周辺遺跡

No	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世	備考
1	樋ノ下遺跡		○					
2	桐平遺跡		○			○		
3	中之沢遺跡		○			○		
4	鍛冶屋遺跡					○	○	
5	水沼寄居遺跡						○	城館跡
6	植村遺跡					○		
7	水沼中谷戸遺跡					○	○	
8	時ノ瀬遺跡					○		
9	上八木原遺跡		○			○		
10	久保遺跡		○			○		
11	皿替戸遺跡		○				○	
12	宮原遺跡		○			○		
13	下平遺跡		○					
14	南雲遺跡		○					
15	下南雲遺跡					○		
16	桑代平1遺跡		○					
17	桑代平2遺跡		○			○		
18	諏訪前遺跡		○			○		
19	小平遺跡		○					
20	正門寺西遺跡		○				○	
21	西久保遺跡		○					
22	深沢城遺跡						○	城館跡
23	後原遺跡		○			○	○	
24	大松遺跡		○			○		
25	安戸遺跡		○					
26	笹後遺跡		○			○		
27	出合原2遺跡		○			○		
28	下前原遺跡		○			○		
29	西前原遺跡		○			○		
30	西ノ久保遺跡		○			○		
31	峯遺跡		○			○		
32	出合原1遺跡		○					
33	尾池原遺跡					○		
34	中後2遺跡		○					
35	中後1遺跡		○					
36	勝負遺跡		○			○		
37	遠背戸遺跡		○			○		
38	中出合原遺跡		○			○		
39	橋上沢1遺跡		○					
40	橋上沢2遺跡		○					
41	中ノ萱遺跡		○					
42	下松葉遺跡		○					
43	八木ノ木遺跡		○					
44	本屋敷遺跡		○			○		
45	合ノ原遺跡		○					
46	大林遺跡		○					
47	南中曾根遺跡		○			○		
48	上北原遺跡		○					
49	中北原遺跡		○			○		
50	西張原遺跡		○					
51	雨堤遺跡		○			○		
52	小田ノ沢遺跡		○					

No	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世	備考
53	葛久保遺跡		○			○		
54	山ノ根遺跡		○					
55	水沼上野遺跡	○	○			○	○	
56	文殊院遺跡		○			○		
57	上ノ原2遺跡		○					
58	上ノ原1遺跡		○					
59	庚申塚遺跡				○			城館跡
60	中清水遺跡		○			○		
61	長久保遺跡					○		
62	茶堂遺跡		○			○		
63	東中ノ平遺跡		○			○	○	
64	前平遺跡		○			○		
65	上西ノ原遺跡					○		
66	東上ノ平遺跡		○			○		
67	上ノ平遺跡		○					
68	一ノ鳥居遺跡		○					
69	原ノ道上遺跡		○					
70	外手遺跡		○					
71	津室遺跡		○					
72	立道遺跡		○		○	○		
73	樽下遺跡						○	
74	中曾祢遺跡						○	
75	道合遺跡		○			○	○	
76	涌丸遺跡		○			○	○	
77	西中田遺跡		○					
78	姥懐遺跡		○					
79	医光寺南遺跡	○	○			○	○	
80	五覧田城遺跡						○	城館跡
81	中谷戸遺跡		○			○		
82	東ノ上遺跡		○			○		
83	御伊勢原遺跡		○					
84	二夕重沢遺跡		○					
85	向反り3遺跡			○				
86	向反り1遺跡		○					
87	向反り2遺跡		○					
88	松山平遺跡		○					
89	岩山遺跡						○	
90	松山遺跡		○					
91	巻寄遺跡		○					
92	吉野入遺跡		○					
93	栗門遺跡		○					
94	石神遺跡		○					
95	大皿久保3遺跡		○			○		
96	大皿久保2遺跡					○	○	
97	大久保遺跡					○	○	
98	鳥居原遺跡		○			○		
99	大皿久保1遺跡		○			○		
100	皿窪城遺跡						○	城館跡
101	横巻り遺跡		○			○		
102	鳥井原山遺跡		○					
103	寄居遺跡		○					
104	下ノ段遺跡					○		

第3章 検出された遺構と遺物

第1節 調査の概要

樋ノ下遺跡調査では、縄文時代遺構の調査と旧石器時代の確認調査を行った。これは、調査範囲の台地では、近代の所作と考えられる土取りにより、弥生時代以降の遺跡が破壊されてしまっていたからである。調査区東側では、縄文時代と考えられる面まで土取りが行われていた。そのため、東側では旧石器時代の試掘調査を行い、西側で縄文時代遺構の調査及び旧石器時代の確認調査を行った。検出された遺構は縄文時代中期住居1軒・小竪穴遺構1基である。調査区が狭小であり、いずれも遺構の一部分のみの検出であった。

第2節 基本土層

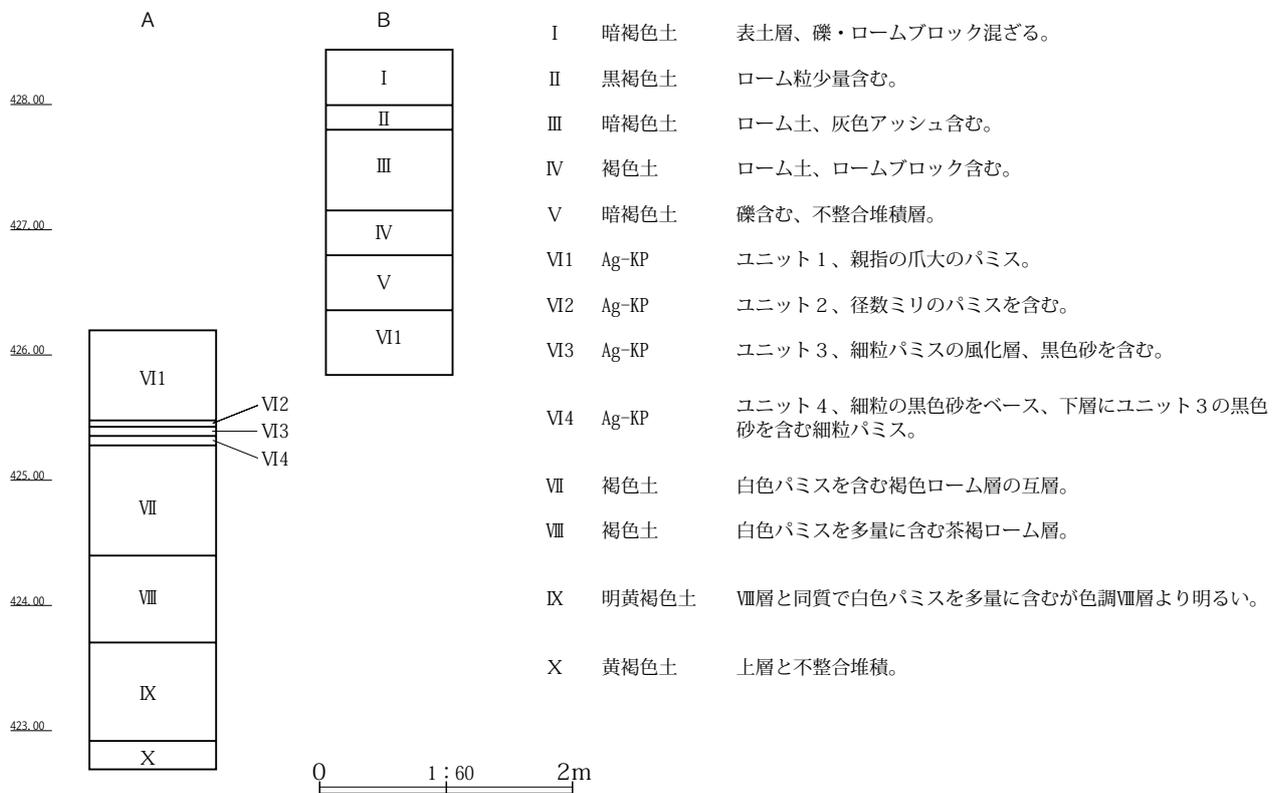
調査区西側では縄文時代面までの土層を確認し、調査区東側と西側では旧石器時代の土層堆積状況を確認し

た。堆積状況は柱状に模して第5図に図示した。遺構が確認されたのは、縄文時代の堆積層である暗褐色ローム土(Ⅲ層)である。火山灰降下物とみられる灰色アッシュを含んでいる。下層の褐色ローム土(Ⅳ層)は灰色アッシュを含んでおらず堆積傾向が異なる。Ⅳ層と赤城鹿沼テフラ堆積層(Ag-KP、Ⅵ層)との間層(Ⅴ層)は礫などを含んでおり、不整合堆積と考えられる。

Ⅲ層土直上に堆積している黒色土(Ⅱ層)は縄文時代以降に自然堆積した層とみられる。しかし、その上層は現表土及び表土直下層であり、近現代に堆積された層と考えられる。

第3節 旧石器時代確認調査

旧石器時代確認調査は調査区の東西で行った。それぞれ1箇所ずつトレンチを設定し、旧石器時代の遺物等について確認した(第6図)。旧石器時代の遺物は、東西ど



第5図 樋ノ下遺跡柱状土層図

第3章 検出された遺構と遺物

これらのトレンチからも出土しなかった。

この確認調査でVI層土以下の土層堆積状況を確認した。赤城鹿沼テフラ堆積層(Ag-KP、VI層)はA地点で約90cm堆積し、VI層が4ユニットからなっていることがわかった(VI1層～VI4層)。最上層のユニット1(VI1層)が一番厚く堆積していた。



第6図 樋ノ下遺跡遺構全体図

第4節 検出された遺構

1号住居 (第7・8図、PL.2)

位置 X=55,840、Y=-50,750 調査区西端

形状・規模 住居全体は検出されていないが、検出部分より楕円形を呈するものと考えられる。長軸(4.8)m、短軸(2.0)mを測る。

面積 (9.28)m²

主軸方位 不明

重複 1号小竪穴遺構を切る。

埋没土 ロームブロックを含む暗褐色土であるが、含まれるロームブロックは多量と言えず、人為的に埋め戻したとは考えられない。

床面 暗褐色土を床面としていた。1号小竪穴遺構と重複する部分では、硬化面が認められた。それ以外の範囲では硬化面を確認することができなかった。1号小竪穴遺構を埋め戻し、床面を硬化させた可能性が考えられる。床面の残存深度は確認面から0.36mを測る。土層断面図から地山を掘り込んで住居を構築していたと考えられる。

柱穴 確認されなかった。

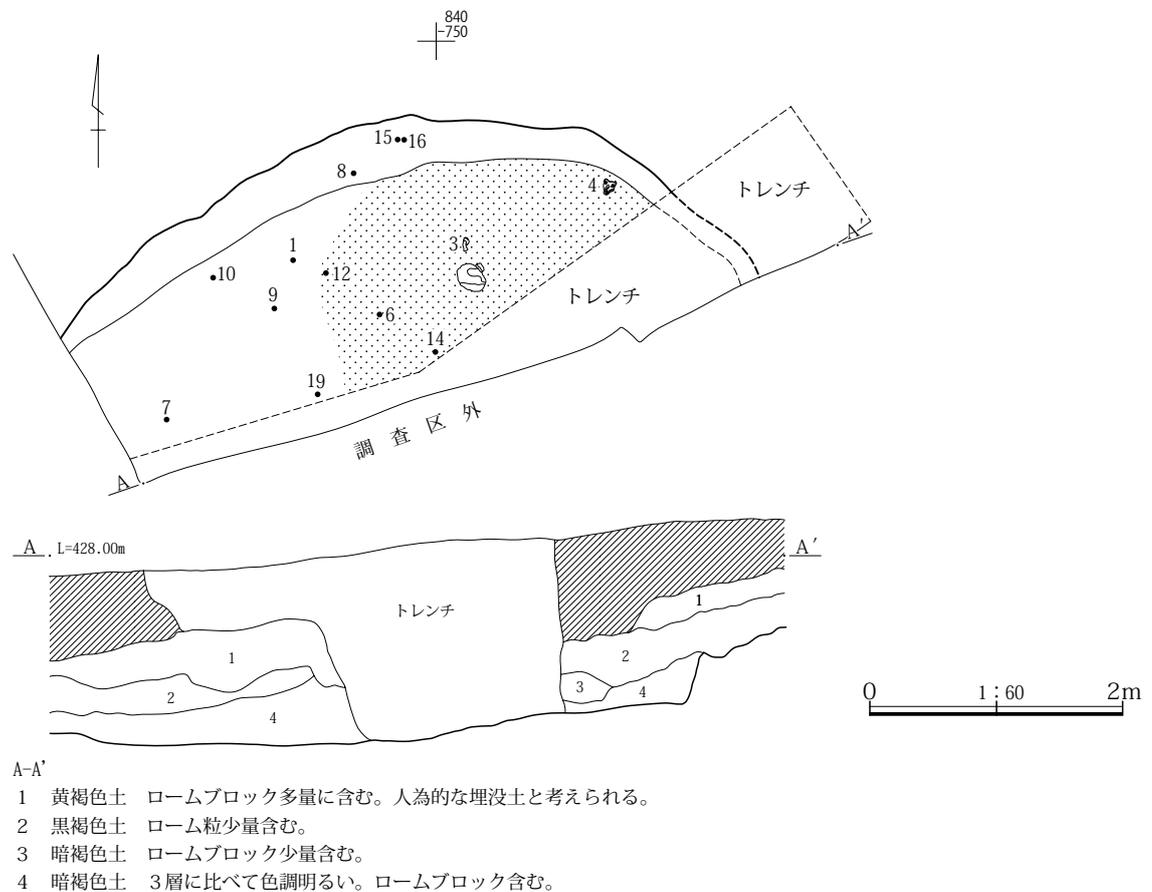
炉 確認されなかった。

貯蔵穴 確認されなかった。

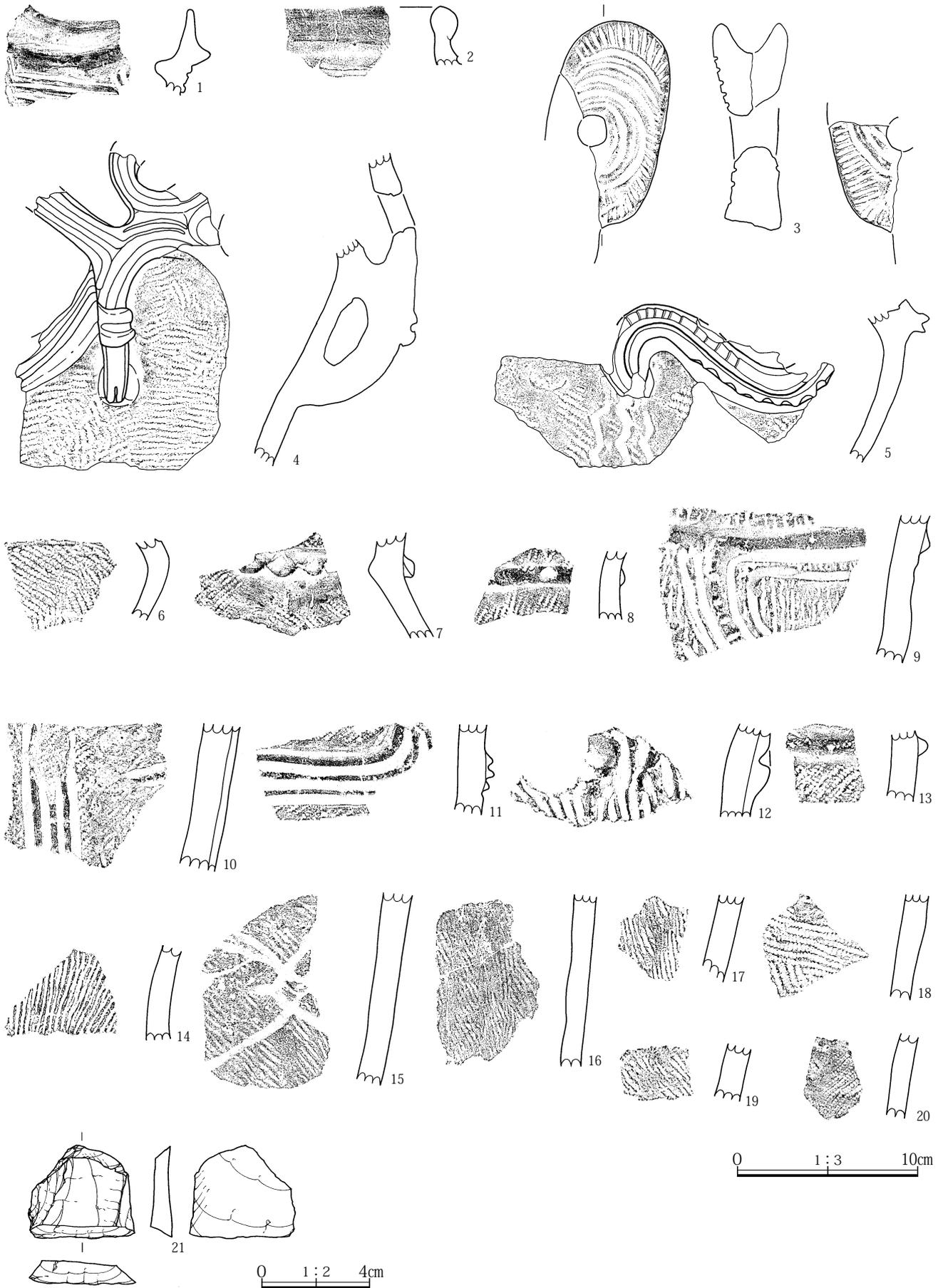
遺物 土器は床面及び埋土から縄文土器77片が出土し、住居に伴うものと考えられる。図化したものは20点である。いずれも中期中葉の特徴を持っている。石器類は剥片が6点出土した。そのうちの1点を図化した。黒色安山岩の幅広剥片であり、打面側から左辺側を粗く加工していた。遺構中央部分より背面側に稜のある垂角礫が出土した。出土時には炉石と考えられたが、被熱痕は確認されず、用途は不明である。

所見 住居の一部分を検出した遺構である。検出部分から直径5～6mの楕円形を呈する住居と想定される。

出土遺物より縄文時代中期中葉の遺構と考えられる。また、遺物のなかには、重複する1号小竪穴遺構から出土したものと接合するもの(第8図4)や、同一個体とみられるもの(第8図10・11・12・17)が出土しており、1号小竪穴遺構廃絶後あまり時間差が無く住居を構築していると考えられる。



第7図 1号住居



第8図 1号住居出土遺物

1号小竪穴遺構 (第9・10図 PL. 2)

位置 X=55,840、Y=50,750 調査区西端

形状・規模 遺構全体は検出されていないが、検出部分より楕円形を呈するものと考えられる。長軸3.12m、短軸(2.2)mを測る。

面積 (5.54) m² 主軸方位 不明

重複 1号竪穴住居が上位に構築される。

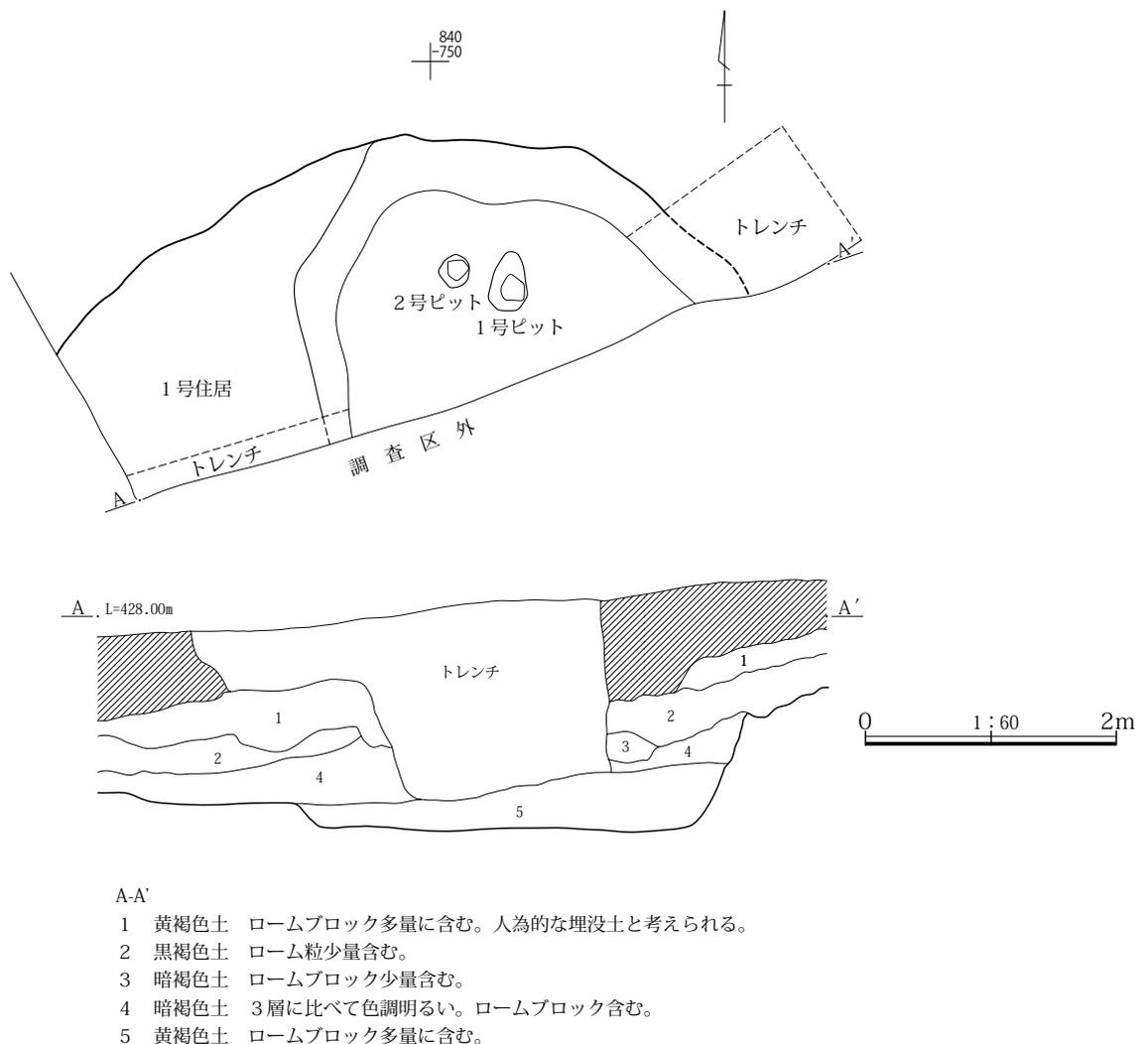
埋没土 ロームブロックを含む暗褐色土(5層土)である。多量にロームブロックを含み、上層は硬化しており、人為的に埋め戻したと考えられる。

壁・底面 壁高は確認面から0.90mを測る。底面は比較的平坦で、2基のピット状の掘り込みが確認された。

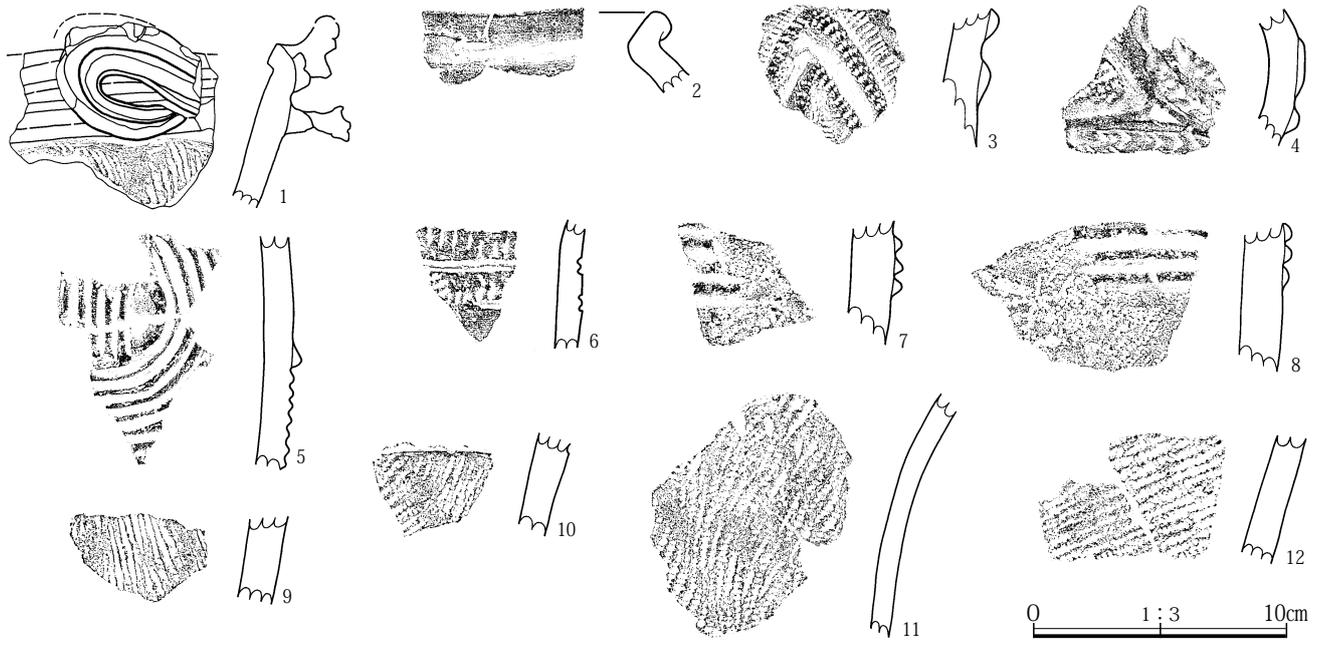
遺物 縄文土器21片が出土した。図化したものは12点である。いずれも中期中葉の特徴を持っている。

所見 遺構の一部分を検出している。検出部分から径2～3mの楕円形を呈する遺構と考えられる。楕円形形状から住居を想定したが、想定する径の大きさから、居住するには狭すぎると判断し、小竪穴遺構とした。本遺構の用途は不明である。遺物の特徴より縄文時代中期中葉の遺構と考えられる。遺構の東から北にかけて壁面を1号住居と共有しているが、その理由は不明である。1号住居は本遺構部分を硬化しており、築造時には本遺構を意識していたと想定できるが詳細は不明である。

また、遺物のなかには、重複する1号住居から出土したものと同一個体とみられるものがある(第9図7・8・9)。本遺構廃絶後、間もなく本遺構を埋め戻して1号住居を構築していたことが想定される。



第9図 1号小竪穴遺構



第10図 1号小竪穴遺構出土遺物

第4章 調査成果のまとめ

桐生市黒保根町では今回調査まで発掘調査事例が無かった。しかし、縄文時代をはじめとした遺跡が広がっていることは広く知られていた。その存在が知られる契機となったのは大正後期から昭和初期にかけての岩澤正作の研究である。岩澤は黒保根地区に隣接する大間々町に居住し、赤城山麓の考古学研究を積極的に行っていた。

黒保根町の研究では、前田原北原遺跡出土の土器片を県内で初めて諸磯式土器として紹介した。また、同地区を中心とした渡良瀬溪谷^(註1)で採集した縄文土器片を観察し、当時の学説に基づき4群10類に型式分類している(岩澤1935)。これら一連の研究は群馬県における縄文時代研究の先駆けとなるものであった。

その後連続とした地元郷土史家による採集等を経て、平成9年には旧勢多郡黒保根村が『黒保根村誌』本編一として出土資料、地点などの集成分行された。平成17年度からは桐生市教育委員会により遺跡分布調査が行われ、平成22年に『桐生市黒保根地区遺跡分布地図』市内詳細分布調査報告書としてまとめられ、黒保根町における遺跡の実態が明らかとなった。

黒保根町で初めての発掘調査が実施された樋ノ下遺跡は赤城山東麓裾野に位置し、小河川の浸食により形成された台地に立地している。今回の調査では縄文時代中期中葉に位置付けられる焼町土器や勝坂式・中峠式・加曾利E I 式土器等の土器を出土させた竪穴住居1軒の一部と、その住居に先行し、あまり時間差のない小竪穴遺構1基が検出された。

今回調査は214㎡と非常に狭い範囲の調査であり、このような調査結果となったが、この台地面に縄文時代中期の集落があったことが想定される。

第2章1項でも触れたが、黒保根町はその大部分が赤城山東麓及びその裾野辺である。赤城山から放射状に延びる河川が幾条にも流下しており、それぞれに段丘及び谷地形を形成している(第3図・第4図)。

これら河川に面する台地に立地している縄文時代遺跡は、田沢川流域では鳥井原山遺跡(第4図102)・寄居遺跡(103)、鹿角川流域では立道遺跡(72)、小黒川流域では西中田遺跡(77)・医光寺南遺跡(79)・姥懐遺跡(78)、

川口川流域では中後1遺跡(35)・中後2遺跡(34)などがある。いずれの遺跡も縄文土器が散布している。

今後の発掘調査を待つところであるが、樋ノ下遺跡の調査成果から、それぞれの河川沿いの台地に立地する縄文時代遺跡から住居及び集落が検出される可能性が高まったと言える。

註

- 1) 岩澤氏が表面採取した地域は当時、黒川谷と呼称されており、現在のみどり市東町及びみどり市大間々町上神梅地区も含まれる。

参考文献

- 岩澤正作1928「県下石器時代遺跡遺物の大要」『上毛及上毛人』第140号
 岩澤正作1933「上毛石器時代遺跡概説(一)」『毛野』第四号
 岩澤正作1935「黒川峡の縄紋土器」『毛野時報』第四号
 大間々町誌編さん室1996『大間々町誌「基礎資料Ⅷ」大間々町の地形・地質
 大間々町誌編さん室1998『大間々町誌』通史編上巻
 桐生市教育委員会2010『桐生市黒保根地区遺跡分布地図』市内遺跡詳細分布調査報告書
 黒保根村誌刊行委員会1997『黒保根村誌』本編1
 群馬県1938『上毛古墳総覧』
 群馬県1991『土地分類基本調査』桐生及足利
 群馬県教育委員会1989『群馬県の中世城館址』
 群馬県史編さん委員会1990『群馬県史』通史編1
 群馬県史編さん委員会1989『群馬県史』通史編3

第4章 調査成果のまとめ

第2表 樋ノ下遺跡遺物観察表

1号住居

挿図番号 PL. 番号	No	器種	部位	出土位置	胎土/色調/焼成			文様の特徴等	備考
					長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)		
第8図 PL. 3	1	深鉢	胸部破片	床上 4.5cm	粗砂、白色粒/にぶい橙/良好			波状口縁の口縁下に隆帯を沿わせ、以下に平行沈線を施す。内面の口縁下には横位の隆帯をもつ。	中期中葉
第8図 PL. 3	2	深鉢	口縁部破片	埋土	粗砂、白色粒/暗褐/良好			口縁部が肥厚し、無文。	中期中葉
第8図 PL. 3	3	深鉢	胸部破片	床上 44cm	粗砂、白色粒/暗褐/良好			口縁部に付く把手で、双頂となり、中心には凹孔が空き、その周囲に弧状の沈線および刻み状の沈線を有する。	中期中葉
第8図 PL. 3	4	深鉢	口縁部破片	床上 53cm	粗砂、白色粒/にぶい橙/ふつつ			波状口縁となる口縁直下に隆帯を沿わせ、さらに立体的な把手を有する。口縁以下にはR Lの縄文を縦位に施す。	中期中葉
第8図 PL. 3	5	深鉢	胸部破片	埋土	粗砂、白色粒/にぶい橙/ふつつ			口縁部の膨らみ部に横位S字状の隆帯を有し、以下にR Lの縄文を縦位に施し、蛇行する縦位沈線を描く。	中期中葉
第8図 PL. 3	6	深鉢	胸部破片	床上 51cm	粗砂、砂礫、白色粒/暗褐/ふつつ			口縁下が大きく膨らみ、R Lの縄文を施す。	中期中葉
第8図 PL. 3	7	深鉢	胸部破片	床下 3cm	粗砂、白色粒/にぶい橙/ふつつ			括れ部に指圧隆帯を巡らせ、L Rの縄文を施す。	中期中葉
第8図 PL. 3	8	深鉢	胸部破片	床上 15cm	粗砂、白色粒/暗褐/良好			横位の隆帯をもち、L Rの縄文を施す。	中期中葉
第8図 PL. 3	9	深鉢	胸部破片	床上 4.4cm	粗砂、砂礫、白色粒/黄橙/ふつつ			地文に縄文を施し、隆帯と沈線で曲線的な文様を描く。	中期中葉
第8図 PL. 3	10	深鉢	胸部破片	床上 22cm	粗砂、黒色粒、白色粒/橙/ふつつ			住居11・小竪穴7・8と同一個体。地文に縄文を施し、3本の隆線を縦位およびL字状に施す。	中期中葉
第8図 PL. 3	11	深鉢	胸部破片	埋土・ 包含層	粗砂、黒色粒、白色粒/橙/ふつつ			住居10・小竪穴7・8と同一個体。地文に縄文を施し、3本の隆線をL字状に施す。	中期中葉
第8図 PL. 3	12	深鉢	胸部破片	床上 52cm	粗砂、砂礫、白色粒/暗橙/良好			小竪穴5と同一個体。曲隆線と沈線を充填して文様を描く。環状突起を有する。	中期中葉
第8図 PL. 3	13	深鉢	胸部破片	埋土	粗砂、白色粒/にぶい橙/ふつつ			横位の隆帯をもち、隆帯上および器面にL Rの縄文を施す。	中期中葉
第8図 PL. 3	14	深鉢	胸部破片	床上 52cm	粗砂、白色粒/暗褐/良好			縦位沈線を密に施す。	中期中葉
第8図 PL. 3	15	深鉢	胸部破片	床下 9cm	粗砂、砂礫、白色粒/にぶい橙/ふつつ			押し引き沈線で文様を描き、地文にLの縄文を縦回転に施す。	中期中葉
第8図 PL. 3	16	深鉢	胸部破片	床下 9cm	粗砂、白色粒/にぶい橙/ふつつ			Lの縄文を縦位回転に施す。	中期中葉
第8図 PL. 3	17	深鉢	胸部破片	埋土	粗砂、砂礫、白色粒/にぶい橙/ふつつ			小竪穴9と同一個体。Lの縄文を縦位回転に施す。	中期中葉
第8図 PL. 3	18	深鉢	胸部破片	埋土	粗砂、白色粒/暗橙/良好			R Lの縄文を施す。	中期中葉
第8図 PL. 3	19	深鉢	胸部破片	床上 27cm	粗砂、砂礫、白色粒/にぶい橙/ふつつ			Rの縄文を縦位回転に施す。	中期中葉
第8図 PL. 3	20	深鉢	胸部破片	包含層	粗砂、白色粒/にぶい橙/ふつつ			L Rの縄文を施す。	中期中葉
挿図番号 図版番号	No.	器種 形態・素材		出土位置	長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)	製作・使用状況	石材
第8図 PL. 3	21	加工痕ある剥片 幅広剥片		埋土	3.9	0.7	12.3	打面側から左辺側を粗く加工する。この加工で打面側が弾け飛んでいる。	黒色安山岩
PL. 3	22	盤状		埋土	24.9	20.4	4004.5	盤状礫裏面側の磨滅は明らかであるが、それが人為的なものか詳細は不明。	粗粒輝石安山岩

1号小竪穴遺構

挿図番号 PL. 番号	No	器種	部位	出土位置	胎土/色調/焼成			文様の特徴等	備考
					長さ (cm)	幅 (cm)	重さ (g)		
第10図 PL. 4	1	深鉢	口縁部破片	埋土	粗砂、砂礫、白色粒/にぶい橙/ふつつ			平口縁の口縁下に隆帯が2段巡り、さらに横位S字状の隆帯を有する。口縁以下にはLの縄文を縦位回転に施す。	中期中葉
第10図 PL. 4	2	深鉢	口縁部破片	埋土	粗砂、白色粒/にぶい橙/良好			口縁部が屈曲して直立する。無文。	中期中葉
第10図 PL. 4	3	深鉢	胸部破片	埋土	粗砂、白色粒/暗褐/ふつつ			隆帯と櫛状工具による押し引きで、V字状の文様を描く。	中期中葉
第10図 PL. 4	4	深鉢	胸部破片	埋土	粗砂、砂礫、白色粒/暗褐/良好			地文に縄文を施し、隆帯で曲線的な文様を描く。	中期中葉
第10図 PL. 4	5	深鉢	胸部破片	埋土・ 包含層	粗砂、砂礫、白色粒/にぶい橙/良好			住居12と同一個体。曲隆線と沈線を充填して文様を描く。	中期中葉
第10図 PL. 4	6	深鉢	胸部破片	埋土	粗砂、白色粒/にぶい橙/ふつつ			平行沈線と爪形刺突を横位に施す。	中期中葉
第10図 PL. 4	7	深鉢	胸部破片	埋土	粗砂、黒色粒、白色粒/橙/ふつつ			小竪穴8・住居10・11と同一個体。地文に縄文を施し、3本の隆線を横位に施す。	中期中葉
第10図 PL. 4	8	深鉢	胸部破片	埋土	粗砂、黒色粒、白色粒/橙/ふつつ			小竪穴7・住居10・11と同一個体。地文に縄文を施し、3本の隆線を横位に施す。	中期中葉
第10図 PL. 4	9	深鉢	胸部破片	埋土	粗砂、砂礫、白色粒/にぶい橙/ふつつ			住居17と同一個体。Lの縄文を縦位回転に施す。	中期中葉
第10図 PL. 4	10	深鉢	胸部破片	埋土	粗砂、砂礫、白色粒/暗黄褐/ふつつ			横位沈線と、R Lの縄文を縦位回転に施す。	中期中葉
第10図 PL. 4	11	深鉢	胸部破片	埋土	粗砂、白色粒/にぶい橙/ふつつ			R Lの縄文を縦位回転に施す。内面に炭化物付着。	中期中葉
第10図 PL. 4	12	深鉢	胸部破片	埋土	粗砂、白色粒/にぶい橙/ふつつ			R Lの縄文を縦位回転に施す。	中期中葉

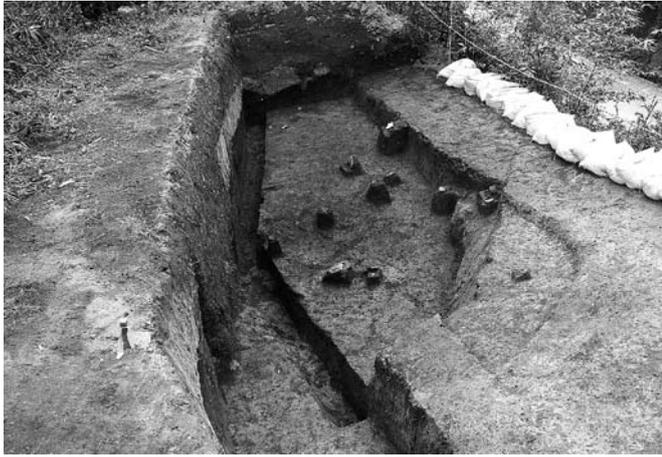
写真図版



1 樋ノ下遺跡遠景(南東から)



2 樋ノ下遺跡近景(東から)



1 1号住居全景(東から)



2 1号住居遺物出土状況(南から)



3 1号住居土層(北から)



4 1号小竪穴遺構(東から)



5 柱状土層(東から)



6 遺構確認作業(東から)



7 樋ノ下遺跡近況(東から平成24年8月3日撮影)



8图1



8图2



8图3



8图4



8图5



8图6



8图7



8图8



8图9



8图10



8图11



8图12



8图13



8图14



8图15



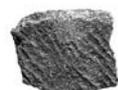
8图16



8图17



8图18



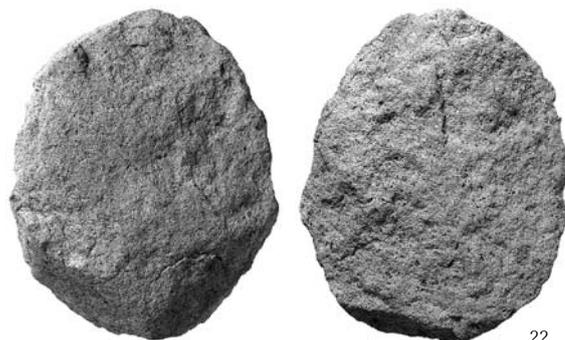
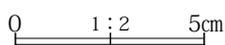
8图19



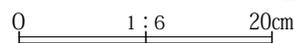
8图20



8图21



22



PL.4



10图 1



10图 2



10图 3



10图 4



10图 5



10图 6



10图 7



10图 8



10图 9



10图 10



10图 11



10图 12

1号小竖穴出土遺物

報 告 書 抄 録

書名ふりがな	といのしたいせき
書 名	樋ノ下遺跡
副 書 名	地方特定道路整備事業(代行)市道 1 級208号線に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻 次	
シリーズ名	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	第548集
編著者名	新倉明彦/長谷川博幸
編集機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20121026
作成法人 I D	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住 所	群馬県渋川市北橘町下箱田 7 8 4 番地 2
遺跡名ふりがな	といのしたいせき
遺 跡 名	樋ノ下遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんきりゅうしくろほねまちしもたざわ
遺跡所在地	群馬県桐生市黒保根町下田沢
市町村コード	10203
遺跡番号	1249
北緯(日本測地系)	362955
東経(日本測地系)	1391612
北緯(世界測地系)	362440
東経(世界測地系)	1391601
調査期間	20110901-20110930
調査面積	214
調査原因	道路建設
種 別	集落
主な時代	縄文
遺跡概要	縄文-竪穴住居 1 + 小竪穴遺構 1
特記事項	縄文時代中期の竪穴住居
要 約	本報告書は社会資本総合整備(活力基盤(代行))市道 1 級208号線事業に伴い、平成23年度に発掘調査が行われた樋ノ下遺跡の報告である。本遺跡からは、縄文時代中期中葉の住居、小竪穴遺構が検出されている。

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第548集

樋ノ下遺跡

地方特定道路整備事業(代行)市道1級208号線に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成24年(2012) 10月19日 印刷

平成24年(2012) 10月26日 発行

編集・発行／公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2

電話(0279) 52-2511 (代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷／上武印刷株式会社
